**復活節第6主日礼拝説教　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2023年5月14日**

**「地の果てに至るまで」**

**イザヤ書52章10節**

**主は聖なる御腕の力を／国々の民の目にあらわにされた。地の果てまで、すべての人が／わたしたちの神の救いを仰ぐ。**

**使徒言行録1章1～11節**

 **1:1 -2テオフィロさま、わたしは先に第一巻を著して、イエスが行い、また教え始めてから、お選びになった使徒たちに聖霊を通して指図を与え、天に上げられた日までのすべてのことについて書き記しました。**

 **1:3 イエスは苦難を受けた後、御自分が生きていることを、数多くの証拠をもって使徒たちに示し、四十日にわたって彼らに現れ、神の国について話された。**

 **1:4 そして、彼らと食事を共にしていたとき、こう命じられた。「エルサレムを離れず、前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。**

 **1:5 ヨハネは水で洗礼を授けたが、あなたがたは間もなく聖霊による洗礼を授けられるからである。」**

 **1:6 さて、使徒たちは集まって、「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか」と尋ねた。**

 **1:7 イエスは言われた。「父が御自分の権威をもってお定めになった時や時期は、あなたがたの知るところではない。**

 **1:8 あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」**

 **1:9 こう話し終わると、イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった。**

 **1:10 イエスが離れ去って行かれるとき、彼らは天を見つめていた。すると、白い服を着た二人の人がそばに立って、**

 **1:11 言った。「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。」**

**「地の果てに至るまで」本日の説教題はこのように付けました。「地の果てに至るまで」「地の果て」皆さんはこの言葉を聞いてどのようなイメージを思い浮かべるでしょうか。**

**私は試しにパソコンで「地の果て」と入力して調べてみました。すると一番上に「秘境**

**知床の宿　地の涯(ちのはて)」という名前の北海道の知床にあるホテルのホームページのサイトが出てきました。「ちのはて」とはホテルにしてはすごい名前を付けるなと思っていたら、「知床」というのはアイヌ語で「地の果て」を意味するので、そこから名前を付けたそうです。知床は去年の観光船の悲しい事故がありましたが、その映像に移る知床の景色を見ると確かに断崖絶壁で大きな波が打ち寄せて厳しい自然の人を寄せ付けない寂しい感じの地の果てという印象があります。イエス様が言われた「地の果てに至るまで」の「地の果て」というのは具体的な知床の事ではありませんが、私たちが映像で見るようなあの厳しく寂しいイメージというのはそんなにかけ離れたものではない、むしろ近いイメージでではないかと思います。**

**私たちはルカによる福音書の終わりの所から共に御言葉に耳を傾けてきました。十字架の死から復活されたイエス様が弟子たちに現れて下さり、信じることができない弟子たちにご自身の復活を示して下さいました。そして弟子たちに「あなたがたに聖霊が降ると主の復活の証人になるのでそれまでは留まっていなさい。」と言われました。そして両手を上げて弟子たちを祝福しながら天に上げられました。弟子たちは大喜びでイエス様を讃美をしていました。**

**それが先週まで共に聞いたルカによる福音書の最後のところです。先ほど司式者に使徒言行録1：1～11を読んでいただきましたが、ほぼ同じようなことが書かれていると思われたと思います。それもそのはずです。1節に「わたしは先に第1巻をして」とあるのはルカによる福音書のことです。これはつまりルカによる福音書の著者であるルカが第2巻を書いた、いわばルカによる福音書の続きを書いたからなのです。そして、その冒頭はルカによる福音書の最後のところをより詳しく書いたのです。**

**イエス様は十字架の死から復活をされて40日にわたって弟子たち・使徒たちに現れて下さり、神の国の福音を宣べ伝え、食事をしたりして共に歩まれました。「エルサレムを離れず、前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。」（4節）と言われますが、使徒たちはその言葉の意味が分かりませんでした。「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか」と尋ねた（6節）とありますように、全く見当違いの質問をしてしまいます。それでもイエス様はそのように無理解な弟子たちを決して見捨てたりすることなく「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」（8節）と言われました。そして天に上げられました。呆然と天を見つめる弟子たちに白い服を着た二人の人がそばに立ち「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。」（11節）とイエス様がいつの日か再び来て下さる再臨の約束をしてくれました。しかも「天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で」ですので、両手を上げて祝福されているそのお姿で再びあなたたち、つまり聖書を読む私たちの所に来て下さるとの再臨の約束の希望の言葉を掛けてくれたのです。**

**イエス様を裏切ってしまい、イエス様が復活されても信じることができない使徒たちです。聖霊の約束を聞いても誓いができずに場違いな質問をしてしまう使徒たちです。その使徒たちに「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」（8節）と約束をされたイエス様の言葉に非常に力づけられます。今エルサレムにいる使徒たちにやがて神様の霊である聖霊が降ると、ユダヤ地方だけでなく異邦人の地サマリア全土に、さらにもっと先の地の果てに至るまでわたしイエス・キリストの証人となる、イエス様の十字架と復活の福音を宣べ伝えその愛を証をする者として豊かに用いられると言われるのです。それが「地の果てに至るまで」なのです。エルサレムから始まって世界中にイエス様の福音が広がっていくのです。さすがにこんなところまで福音は届かないだろうと思われるような地の果てまでも福音が届くのです。そしてそのために使徒たちさらにイエス様を信じる者たちさらに私たちがイエス様の愛を証しをする者として豊かに用いられるのです。**

**「地の果てに至るまで」なんと希望に満ちた言葉だと思います。でも私は「地の果てに至るまで」の言葉は、「世界の隅々に至るまで」というように頭の中に世界地図が思い浮かんで、その世界地図の隅から隅まで福音が広がっていくそのような地理的な空間的なものをイメージしていました。でも改めてこのイエス様の言葉をよく読むともっと深いものがあることに気づかされました。**

**「地の果て」という言葉の元々のギリシャ語の言葉の「地」には「大陸」とか「世界」という意味があります。そして「果て」には「端」とか「最後」という意味があるのです。それは世界の隅から隅までという地理的・空間的な端だけでない、この世界の片隅で小さくひっそりと毎日を過ごしている人にもイエス様の愛の福音が届くことを意味しているのです。「わたしなんて生きていていいのだろうか」「私が死んでも誰も悲しんでくれないに違いない」そんな辛く苦しい思いでこの世界の片隅で静かにひっそりと暮らす人の所にも福音は届くのです。「私のところには福音なんて来るはずがない」そう思い込んでいる人の元にもイエス様の愛の福音は誰かを通して届き「あなたは愛されている。あなたは生きていていいんだよ」と大きな慰めが与えられるのです。それはちょうど知床のような、断崖絶壁の厳しく寂しい誰も近づけないような、絶対こんなところには誰も来てくれないというような寂しい心の中にある人、「地の果ての」「世界の果ての」人の元にもイエス様の愛の福音は届くのです。主の証し人を通してあまねく届けられるのです。**

**そもそも私たちの誰もが「地の果て」です。「世界の片隅」で静かにひっそりと暮らす者です。そして私たちはこんな私の元には福音は来ない、届かない、イエス・キリストは来ないと思っていました。だから私たちは好き勝手に生きてきました。自分が正しいと思い込んで行動をし、人を傷つけ傷つけられて生きてきました。そんな毎日に疲れてしまい、寂しい心を何かで埋めようとしていました。でもどうすればいいのかわからない。そんな私たちのところに、キリストの証し人が福音を届けてくれるのです。それは言葉かもしれませんし、言葉ではなく小さな愛の業かもしれません。キリストの言葉にまたキリストの香りを放つその愛の業に地の果ての世界の片隅の私たちの心はやがてイエス様の愛を信じて受け入れることができるようになるのです。「こんな私が愛されている生きていていい」という喜びを私たちが信じて受け入れることができるようになった時、その喜びは私たちの周りの誰かに伝えたくなりますし、誰かと分かち合いたくなるのです。そのようにして「地の果て」「世界の片隅」の私たちがキリストの証人として豊かに用いられていくのです。**